

千葉吉裕

東京都立晴海総合高等学校 キャリアカウンセラー

幸せとは

『フランダーズの犬』という児童文学があります。1970年代、アニメ化され、高視聴率を上げたので、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。

主人公は将来画家をめざす少年ネロ。祖父と、老犬のバトラッシュと一緒に、ミルク運びで生計立てながら暮らしています。ネロは、正直者で、絵画の才能も長けていました。しかし、仕事は奪われ、祖父は亡くなり、住んでいた小屋も追い出され、コンクールに出した渾身の作も、僅差で落選、次々に不幸がネロに襲いかかっています。すべてを失ったネロは、クリスマス前の前夜、雪の中を大聖堂へ向かい、真っ暗な大聖堂の中に入り込みます。そこには、貧しかったため、閲覧料を払えず観ることができなかったルーベンスの祭壇画が掲げられています。真っ暗な大聖堂、雲間から射し込んだ月明かりが、憧れの祭壇画を、一瞬、照らし出すのです。ネロは喜び、神に感謝します。ネロの才能を認められた著名な画家らが、ネロを引き取って養育しようと思いましたが、すでに遅く、クリスマスの朝、祭壇画の前で愛犬と一緒に息を引き取り冷たくなったネロが発見されるのです。

この児童文学を悲劇の少年の話と捉えていたのですが、ある著名人の講演会で、この物語はキリスト教文化の視点で幸せについて描いたものだと言われました。改めて、読み返してみたのですが、やはり悲劇にしか感じられませんでした。皆さんは、どう思われますか。

絵の才能もあり、正直者のネロが、職も失い、金も、名誉も、バトラッシュ以外の関わりも失い、最後は命さえも失っていく。もう少し早く支援者が現れていれば死ぬこともなく、絵の才能を磨くこともできたでしょう。悲しみにいられません。しかし、再度丁寧に読み返してみると、ネロは祭壇画の絵を観ながら、神様の慈悲に感謝しています。冷たくなった死に顔には喜びの笑みをたたえていたのです。このインディングに大きな意味があるのでしよう。キリスト教としての象徴的な意味があるのでしようが、その解釈は宗教家に任せたいと思います。ここでは、人生における喜びや幸せについて考えてみましょう。

職や、お金、住処、食べ物、名誉があれば喜びや幸せがあると、多くの人は信じています。しかし、安定した職をもっている人でも、富をもっている人も、食べるのに困らない人の中にも不幸な人はたくさんいます。幸せは「お金持ち」と、「貧乏人」を差別して与えられるものではないように思うのです。『フランダーズの犬』では、究極の状況の中でも喜びや幸せを感じることもできると語っています。

人は幸せになりたいと、努力し行動します。学校での勉強にしても、進路指導にしても、将来の幸せを考えての活動です。なりたいたいのを目指し、欲しいものを手に入れようと努め、起こってほしい出来事を待ち、やりたいことを実現しようとしています。それが「夢や希望」です。人それぞれ、富、愛、

名誉、勝利、職、合格、地位、長寿、健康、若さ、美貌……、さまざまな達成したい願いがあります。それらの目標は、人が成長するのに大変役に立ちます。「夢や希望」の実現を目指すことを否定しているわけではありません。ただ、それは人生の目標ではないと思うのです。達成できなかったら不幸になるわけはありません。加えて、それらを達成した瞬間は大きな喜びを得ることができませんが、長期にわたって幸せになるとは限りません。「夢や希望」の実現はその先にある長期にわたって幸せになれるかもしれないという「期待」の上に存在していると思うのです。

学校現場における誤った指導は、その目標を達成すれば、「幸せ」が訪れると信じさせて行動させることです。すると、目標を達成するまでの過程は、苦しいつらい作業に感じることになります。目標を達成したとしても、達成したときの喜びが永続するわけではありませんから、また次の目標をめざし、苦しくつらい過程を過ごす人がたくさんいます。端から見れば、目標を達成しているのに、成功しているように見えるのですが、心の中は空虚だったりします。

結局、どんな状況に置かれていようと、日々の生活の中には、必ず喜びや幸せがあります。それに気づくことができるかが、重要です。ネロを不幸せと感じてしまったことは俗物的な幸福感に侵されているのかもしれないですね。